

すいかの産地の最新技術



西部すいか選果施設の機械（一部）

センサーにて空洞、熟度等を判定



すいか箱詰めも自動化されている

現在、西部すいか選果施設では、最大で1日あたり大玉すいかを40,000玉、小玉すいかを10,000玉も出荷することができる。

すいかが消費者に届くまで 選果施設の機械化

山形県の夏の味覚を代表する尾花沢すいか。全国有数の生産量を誇るこのすいかは、尾花沢市、大石田町、村山市で生産された後、大規模な選果施設にて仕分け、箱詰めが行われ、県内外の消費者のもとへ届いている。

大石田町にある西部すいか選果施設は、平成2年より機械を導入し始めた。それまでは、荷卸しや箱詰め、運搬などは全て手作業で行っていたため、作業の大幅な省力化、効率化に繋がった。選果施設の整備事業が進むなかで、ロボットアームや自動箱詰め機などの新しい機械の導入が進み、平成29年には機械の再整備を行い、より新しく、大規模な機械を導入している。

最新の選果施設では、選別作業から箱詰めまでのほぼ全ての作業を機械化しており、数多くの尾花沢すいかを出荷している。

最新技術で後継者確保へ

大石田町と村山市のすいか生産者 206 名で構成される大石田すいか生産部会では、後継者確保に向けた取り組みが熱心に行われている。昨年、収穫作業の省力化を図るため、有志でアシストスーツを購入した。農業＝重労働といったイメージを払拭し、新規就農者の確保に繋がればとの思いで購入したとのことだ。購入したアシストスーツは集落毎に保管し、希望者へ貸出を行っている。今後も生産現場で活用していきたいとのことだ。



すいかアシストスーツ
動作を助け、体への負担を減らす。

すいか おいしさの秘密

尾花沢すいかの強い甘みの理由として、北村山地域の昼夜の寒暖差がよく知られている。しかし生産者の手間を惜しまない丁寧な栽培こそが最大の理由だ。

すいかの作付は 4 月に始まる。

授粉や、余分なつるを摘む仕立てなど人の手が必要とする作業は多くあるが、特に技術が必要とされるのがつる引き作業だ。つる引きとは、畑にかけられたビニールの中にちょうどよく実がなるように行われる作業だ。伸び続けるつるは放っておくと複雑に絡み合ってしまう。これを丁寧に引つ張り、ビニールの中に納まるように誘導していく必要がある。みちのく村山農業協同組合西部すいか選果施設部会の斎藤副部長は「この作業が一番大変、子供の面倒を見るような気持ちで育てている」と語った。



西部すいか選果施設部会 斎藤副部長



すいかのつるの様子